

「神の母聖マリアの祭日」ミサ説教 2022年元旦

鹿児島カテドラル・ザビエル教会

皆様、新年おめでとうございます。今年もどうぞよろしく願い申し上げます。

さて、私たちカトリック信者は毎年、この「神の母聖マリアの祭日」で新年を始めます。それはとても信者として相応しいことだと思えます。

その意味をお話します。

私たちは丁度一週間前に主イエスのご誕生をお祝いしました。そして今日、イエスのお母さんであるマリア様をお祝いします。マリア様の誕生日ではありません。マリア様は単に「イエスの母」、でも「キリストの母」でもなく、「神の母」である、と称されるところに意味があります。

つまり、313年ローマ帝国内においてキリスト教が容認されて以来、キリスト教徒が激増しました。と同時に、キリスト教の信仰箇条も確定していきました。それは381年の事です。

私たちが毎週の主日にミサで唱える、ニケア・コンスタンチアヌス信条がそれです。そしてそれから、50年後にエフェゾの公会議で、マリア様に神の母の称号が与えられたのです。これは、東方教会、ローマ・カトリックともに教義として認めますが、16世紀に興ったプロテスタント教会では認められていません。

では、その内容についてお話します。マリア様への崇拝は、イエス・キリストに対する信仰の理解が深まるにつれて、高まっていきました。旧約時代の神への信仰はいわば、絶対的なもので、近寄りがたく、畏怖の念を抱かせるものでした。勿論それはそれで、法と正義による治世を実現するためには必要なことでした。あえて言うなら、旧約時代の信仰はどちらかというと神への忠実にウエートがありました。

それに対して、新約の始まりである、マリアとイエスは、信仰と恩恵の世界だと言えるでしょう。それはひとえに、神が人間となって、私たちと同じ次元で、生活の苦楽を共にしてくださったからです。言葉が人間となって、私たちのうちに住まわれることが可能になったのは、とりもなおさず、イエスはマリアによってお生まれになったことによります。しかも、マリアは、普通

の人間として、つまり高貴な身分ではなく、また、生きていくためにはたら働いている庶民として生きていた方でした。ナザレの村の暮らしぶりがそのことを物語っています。

そのようなことで、イエスを神として信じる者が、彼を人間イエスとして共感できるとしたら、マリア様は、天の御父の人類救済のご計画に、その信仰をもって協力なさったのだということが理解できる、と思います。「イエスの母」でも「キリストの母」でもなく、「神の母」という最高級の称号を付与した、当時の公会議の教父たちの上には確かに聖霊が働いておられたに違いありません。

さらに、「神の母聖マリア」は、教会、すなわち神を信じる新しい神の民の原型であるともいわれます。なぜなら、マリアが聖霊によって神の子をお産みになったように、教会は、同じ聖霊によって、この地上で、神の子らを産み続けているからです。

幼い命を産み育てたマリア様のように、教会も「この最も小さいものにしたことは、すなわち、私にしたことである」と言われるイエスの言葉に従って、助けを必要としている命に奉仕していきたいものです。

そこに教会の使命があると思うからです。